

とて丸魚突スキンになつて、天満におはしける其繪を見るに、ヤスをもて突て取なり。元祿曾我伏見船の乗合にて、京の人と大坂の者と物争ひする處、大坂の人料理したすつぼんがあるが、京人くじん、し鹿子や紅染は、都でなければならぬ云々、京は其頃迄すつぼん食ふもの稀なりしを知べし。諸藝太平記四、元祿十五年板遊女がことをいふに、たとへ納戸ではすつぼんの料理をまいらうとも、それはしりてがない云々、又元祿十七年草子誰袖海に、京人江戸に下り居たる處、寒さは雞卵ざけにわすれずつぼんもくひならひ、雞のなき内はこれもましと云々あるをみるに、下賤の食物なり。それより寛延四年の江戸鹿子新增迄は五十年に近きに、猶產物の内にかすまへいれぬは、鰯よりも劣りたるものにてありしなり。寛延七年草子伽羅女に、新地堀江の料理茶屋にて、鰻のかばやき丸龜スラボンまいる云々、難波にては、其頃うなぎと並び行はれたり。江戸は下手談義に賣ト者のことといふ處、柳原の長堤に泥龜スラボンの煮賣と軒をならべと有。寛延寶曆の頃は、此體にて葭簀の小屋にて、今の山鯨の風情よりあさましき賣物と見えたり。是故にや、今は價うなぎよりも貴す。

〔浪花街迺尊〕千長、万松さんまだ分らぬものがある、此じの字の下へ○をかいたはこりやア何だらふ、万松さればさ馬鹿バカくしく聞れもしめい、あんまり知恵がねいやうだ、千松、旅の恥はかきずてだ、きいて見や正、オイ姉さん、此じの字の下へ○をかいたのはこりやア何だね、已前の女また奥よりいで、女房、ハイくそれはまるでムリ升、万松、わからぬかほにて、まるは知つて居るが、まさか四角とは見えないが、其まるが分らぬのだ、千長へ、知れやした、姉さん團子のことだらふ、女大わらひにわらひふき出しながら奥へゆく、女房、イへくめ、さうな、コリヤお江戸でいふすつぼんでムリ升、万松、又やりそくなつた、なるほど土鱈チヌのことを上方で丸といふことはきいてゐたが、畫で○がかいてあるから分らぬい、そして上にあるじの字は何の印だね、女房、ハイ